

言葉から始まる

水族館計画

水族館プロデューサー

中村 元

『天空のオアシス』『生きてゐる水塊^{すいかい}』『北の大地の水族館』『ニッポンの水族館』『超水族館／海より広い海がある』。

これらは今まで私が関わった五つの水族館で、リニューアルや新設オープン時のポスターおよびCMに使ったキャッチコピーだ。ただし、完成した水族館を見てコピーライターがつくったのではなく、いずれも展示計画を始める前の基本構想時に、水族館プロデューサーとして私が考えたものだ。水族館のリニューアルや新設にあたり、どのような理念で計画し実現するかを関係者に宣言するのが私の常なのだが、それを最も短くまとめたスローガンとしての言葉が、冒頭のコピーだ。

展示理念を正しく実現できたとき、その水族館を最も的確な言葉で表しているのは、スローガンということになる。だから、宣伝のキャッチコピーも同じ言葉になるのが当然。……いや、そうだろうか？ そんな都合のいい話があるわけではない。

実を言えば私は、最初から、オープン

心となり、最終的に大衆に伝えるためのキャッチコピーにもなるのだろうと自負している。

言葉とは、前述したように「最も普遍的で扱いやすい道具」であるがため、ふだんはどんざいに扱われることが多い。しかし、真剣に向き合って扱えば、言葉は力強い『象徴』となり、素早く拡散する『印象』となり、時にはその両方の力を持つ。

いったい水族館とは、生物を展示するところであり、展示とは「見せて伝える」ことだ。辞書によれば、展示とは「見せること」としか書かれていないが、「伝える」という目的がなければ見せる意味もない。だから水族館が、見せて「伝える」施設であることを私はとても大切にしているし、見てもらえない展示、見ても何も伝わらない展示は、あつてはならないという信念を持っている。なぜなら、生物たちは展示されるという目的のためだけに、捕らえられ閉じ込められているのだから。見せて伝える目的が果たせないのなら、彼らを解放してあげる



べきなのだ。

私が「はじめに言葉ありき」にこだわるのは、その考えを実践するためだ。人々に何かを確実に伝えられる水族館を開発するために、開発スタッフの拠^より所となる理念の象徴として、言葉を提示する。また、そうやって完成した水族館の魅力ができる限り多くの人々に届けるために、印象の強い言葉を使うのだ。

実のところ、私が言葉について真剣に向き合うのは、ほとんどこのときだけだ。ふだんの私の言動は、いかにもいい加減

員の資格を持つてゐるわけでもないし、エンタテインメント畑の出身でもない。さすがにそれらにまったく興味がないということもないが、せいぜいちょっと好奇心の強い大衆の一人ということろだ。にも関わらず、「唯一の水族館プロデューサー」として仕事を依頼していただける程度には成功実績を重ねている。

その秘密が「はじめに言葉ありき」のやり方だ。もちろん、言葉は神と共に……というような聖書とは関係ない。いわゆる「言霊^{ことたま}」的なアレでもない。ただ単に、言葉は何かを伝える道具として最も普遍的で扱いやすいものである、というだけのことだ。

だから私には、天からの啓示のごとくキャッチコピーが閃^{ひらめ}くようなことはない。水族館の立地や特徴、時には弱点を並べてはひっくり返し、その時代のお客様さんの欲求を大衆性の側から深く探り、ああでもないこうでもない、こねくり回しているうちにようやく生み出しているのだ。そうやって生み出された言葉だから、水族館の開発理念の最も重要な核

で適当で、時には誤用もあったりしてまるでデタラメだ。ところが、ふだんはその方が真意が伝わりやすく、より深く意味が伝わったりするのでから面白い。

おそらく、ヒトが人らしくあるための基本的な言葉とは、このふだん使いのいい加減な言葉の方なのだろう。二人で、あるいは家族的な集団で、互いに伝え理解し合うのに最適な言葉、本来のヒト社会に必要だった言葉。その言葉が発せられるときには、その空間で共有するイメージや感情がある。発された言葉はその場にいる人々の記憶や心にだけとどまる。たとえ文字に残されても、そこには感情や時空間までもが現れ、人の手で回覧されたり書き写されたりすることで、伝える人の感情が上乗せされ、伝えられる度に変化がもたらされうる。その言葉とは、マス媒体で伝達され、言葉だけが単独で拡散されていく今の時代の社会的言葉とは性質のまったく違う、穏やかで大らかなイメージのやり取りのことに違いない。



なかむら げん
中村 元

水族館プロデューサー。1956年三重県生まれ。鳥羽水族館副館長を経て水族館プロデューサーとなり、「新江ノ島水族館」「サンシャイン水族館」「北の大地の水族館」のリニューアル、広島「マリホ水族館」新設などを手がけ、いずれも奇跡的な集客増に成功した。水族館文化発展のために、トークライブ「超水族館ナイト」を開催して10年目。近著には『水族館哲学生活が変わる30館』（文春文庫）、『いただきますの水族館』（瀬戸内人）など。